

国造軍と鞠智城

小嶋 篤

本研究では、「古代山城がどのような動員体系に基づいて、築城され、運用することを計画していたのか」という根本的課題を追究した。本課題を追究するには、各事象の年代特定が「歴史学」としての絶対条件である。そこで、まず古代山城研究の原点とも言える築城年についての最新研究を積み上げた。

鞠智城跡の調査研究を筆頭とする実証的研究成果の到達点・資料的限界を確認した上で、大野城跡出土土器の総量分析に着目した。国家が重視した第一段階古代山城に属する大野城は、古墳時代以前の集落・墓域と重複関係にない新規築城型古代山城である。このため、最古相の土器となる小田編年Ⅴ期（飛鳥時代後半・七世紀第3四半期）の須恵器が築城時期をより鋭敏に反映すると把握した。

第一段階古代山城の築城時期をより絞り込んだ上で、「倭政権の統治と外征」・「国造軍動員と労役」を検討し、文献史料と考古資料を突き合わせながら、国造軍の成立から終焉にいたる兵制史を整理した。第一段階古代山城築城の前段階（小田編年ⅣB期）にあたる孝徳朝下では、天下立評による軍事・労役動員方式の改変が見込まれるが、その痕跡は評衙遺跡としては確認できない。最も視認し易い痕跡が、各豪族による私的動員で築造されてきた大型墳であり、とくに国造軍（外征軍）動員路の収束地・駐屯地である壱岐島の大形墳築造停止（小田編年ⅣB期）が象徴的事象と評価できる。また、古墳・集落を含めた筑紫嶋の遺跡動態から俯瞰すると、百済の役と古代山城群の築城には、古墳時代後期より本格化した丘陵地開発・人口増加で蓄積してきた物資・人員が投入された構造となる。

『日本書紀』記載の「築・築城」が、古代山城の「築城開始」・「築城完了」のいずれを示すかは未決着であるが、第一段階古代山城の築城期間には「戦時」が含まれており、国造軍駐屯期間と重なる。平時とは異なる「戦時」での国境域における軍事施設整備には、駐屯中の国造軍も動員されたと見るべきで、新規徴発の労役と組み合わせる早期の築城が図られたと考える。そして、百済の役直後の防衛においても、国造軍（国造軍Ⅱ・2期）が古代山城群を軍事的に運用できる唯一の動員体系であったと結論できる。

国造軍と鞠智城

小嶋 篤

はじめに

平成二七年度鞠智城跡「特別研究」では「鞠智城築造前後の軍備」と題して、鞠智城の戦術的運用の研究に取り組んだ（小嶋二〇一六b）。次いで、令和二年度鞠智城跡「特別研究」では、「火国の領域設定と鞠智城」と題して、鞠智城の戦略的運用の研究に取り組んだ（小嶋二〇二二）。また、これらの研究遂行では現代の合理的思考・認識ではなく、古代山城が築かれた飛鳥時代の合理的思考・認識に近づくために、出土遺物・遺構の実態をおさえた上で、『日本書紀』記載集団戦闘の検討成果も反映した（小嶋二〇一六ac）。

以上の諸研究を経て、令和五年度鞠智城跡「特別研究」で取り組むのが「古代山城がどのような動員体系に基づいて、築城され、運用することを計画していたのか」という根本的課題である。とくに前稿「火国の領域設定と鞠智城」では、国造軍・評造軍の変遷が未整理であった（註1）。

これらの課題を追究するには、各事象の年代特定が「歴史学」としての絶対条件である。そこで、古代山城研究の原点とも言える築城時期についての最新研究を積み上げる。なお、考古資料に基づいた時期区分については、消費遺跡の動態把握に優れている小田富士雄氏の須恵器編年で表記し、その細分に際しては適宜、陶邑編年を並記する。時期区分と暦年代の対応関係は、本稿「図17 国造軍の変遷と筑紫嶋の変遷」を参照頂きたい。

一 古代山城の築城時期

古代山城の築城時期を示す文献史料・考古資料を整理する。とくに『日本書紀』に築城記事があり、豊富な出土資料を有する大野城を軸に、築城時期を検討する。

（一）文献史料上の古代山城

国史記載の古代山城 『日本書紀』記載の古代山城関連記事のうち、大野城築城を含む天智紀のものを時系列で整理する。

- ①天智天皇三年（六六四）是歳条、於对馬島・杵岐島・筑紫国等、置防與烽。又於筑紫、築大堤蓄貯水。名曰水城。
- ②天智天皇四年（六六五）秋八月条、遣達率答本春初、築城於長門国。遣達率憶禮福留・達率四比福夫於、筑紫国、築大野及椽二城。
- ③天智天皇六年（六六七）十一月是月条、筑倭国高安城・讃吉山田郡屋嶋城・对馬国金田城。
- ④天智天皇八年（六六九）八月己酉条、天皇高安嶺、議欲修城。仍恤民疲、止而不作。
- ⑤天智天皇八年（六六九）是冬条、修高安城、收畿内之田税。
- ⑥天智天皇九年（六七〇）二月条、又修高安城積穀與塩。又築長門城一筑紫城二。

以上の記事①～⑥は、すべて白村江の戦い（六六三年）以後であることから、韓半島における倭国軍敗退以後に国史記載の古代山城が築城されたと読める。ただし、「築大堤蓄貯水」、「築城於長門国」、「築大野及椽二城」と記録された「築・築城」が、「築城開始を示す」と「築城完了を示す」のかは、未決着な研究課題である（向井二〇一七）。

高安城変遷モデル 国史記載の古代山城のうち、最も記載頻度が高い高安城に着目する亀田修一氏は、古代山城の変遷モデルとして、「築城（作業小屋などを含めて、城壁・門などの外郭施設造営）→一部並行して、舎屋・倉庫などの建物、貯水施設などの造営→物資搬入→維持管理しながら修理など→廃城により建物移築・物資移動→その後の使用・放置」という変遷例を提示する（亀田二〇一八）。

（二）古代山城の年代論と鞠智城跡の調査研究

古代山城出土遺物の資料的限界 遺跡の年代決定は、①考古学、②文献史学、③理化学の三分野の相互検証が重要である。このうち、①考古学による年代決定では、各種資料に対する「層位論・型式論を組み合わせた相対編年の構築」を重視する。安定的な相対編年構築のためには、分析対象資料数および資料の層位検出記録数を豊富に確保できることが望ましい。本原則を古代山城に適用すると、まず突き当たるのが分析対象資料数の少なさであり、大半の古代山城では分析をなし得ても、情報の質として安定的な結果を導き出すことが困難である。

鞠智城の調査研究 資料的限界を克服できる数少ない古代山城が鞠智城跡であり、同遺跡の調査研究により、古代山城研究は新段階

へと歩みを進めたと評することができる。とくに鞠智城跡で実施された出土遺物の総量分析は、考古学的手法により導き出された堅実な研究成果として高く評価できる（木村編二〇一五等）。本稿が主題とする古墳・奈良時代の様相を要約すると、鞠智城跡は古墳時代集落と重複することから、古代山城築城以前の遺物が出土するが、土器出土量は七世紀第3四半期（小田Ⅴ期）に微増し、七世紀第4四半期～八世紀第1四半期（小田Ⅵ期、六九八年「緒治」）に激増する（木村二〇一六）。次いで、緒治後の八世紀第2～3四半期（小田ⅦA～ⅦB期）の出土土器は皆無である。緒治後における土器量減少については、亀田修一氏より修正案が提示されており、「木村氏が提示した案は基本的に土器が作られた時期を示すもので、実際に使用する年代幅を加えると、木村氏の七世紀第4四半期～八世紀第1四半期の下限の幅はもう少し広がる」（亀田二〇一八、矢野二〇一八・二〇一九）。

（三）古代山城未完成論と史料未記載古代山城

国家運営上の重要度 古代山城未完成論を組み込む亀田修一氏は、上記遺物論もふまえた上で、①外郭施設の完成度、②城内施設の存在と維持管理状況から、国家・大宰府が重視した城は「高安城、大野城、基肄城、鞠智城」が最上位にあり、「鬼ノ城、金田城、屋島城」がそれらに準じると評価する（亀田二〇一八）。そして、史料に見られない古代山城の多くは未完成の状態で築城を停止したと考える。

史料未記載古代山城の築城時期 未完成という現象は、史料未記載古代山城の築城時期が、史料記載古代山城よりも後出する蓋然性が高いことを示す。稲田孝司氏による城塁構造の系統区分と段階設定は、

亀田氏の分析結果とも大部分が重なっており、国家・大宰府重視の古代山城（第1段階）から築城がはじまり、第2・3段階に史料未記載古代山城の多くが築城されたと理解できる（稲田二〇一二）。

（四）大野城跡出土土器の総量分析

大野城と四王院 古代山城の最密集地点が後の筑紫大宰府であり、古代山城群の中核施設が政庁後背に位置する大野城である。律令国家形成過程で多くの古代山城が廃城となる中、大野城は大宰府外郭・城庫として大宰府管轄下で存続した。この大野城域内に建立されたのが、大宰府四天王寺（以下、四王院）である。四王院創建の経緯は『類聚三代格』宝龜五年（七七四年）三月三日官符に、新羅の呪詛への対抗策であることが明記されており、その運営も大宰府の庫物や正税を財源とすることから国策として創建されたと理解できる。そして、四王院に起因すると見られる地名「毘沙門・広目天・増長天・持国天」が四王寺山山中に分散する。つまり、大野城跡と四王院跡は重複関係にあり、七七四年以降の遺物には大野城と四王院の帰属遺物が複合する。

豊富な出土土器 以上の遺跡形成をふまえつつ、筆者等は六六五年に築城記事をもち、鞠智城とともに繕治された記録がある大野城についての総量分析を進めている（吉田他二〇二二）。大野城跡・四王院跡出土土器の総量は、4,101点（九州歴史資料館所蔵品のみ）にも及ぶ。本点数はいわゆる土器片の点数であり、土器の個体数と直結するわけではなく、同一個体の破片も内包する可能性が高い。しかし、各地点に遺存する土器量、すなわち人為痕跡の濃淡のうち、人為痕跡が濃厚な地点の時間軸把握には有効な数量である

（図1～5）。

土器出土数量は、四王寺山の最高所である大城山山頂（標高410m）を内包する「毘沙門天地区」が3,514点と突出して多く、全体の85%以上を占める。大野城を構成する倉庫群・城門を主体とする地区では、八ッ波地区（339点）、太宰府口地区（186点）が出土点数の多い地点となる。「館」銘墨書土器・文様塼が出土する等、大野城の管理棟があると目される主城原地区の土器出土量は42点である。

大野城帰属遺物の様相 四王院建立は宝龜五年（七七四年）であるため、大野城Ⅱ期（小田ⅦA期・八世紀前半）以前の遺物は大野城帰属遺物と見なしてよい（図4・5）。とくに、大野城築城と関わる遺物としては、主城原地区出土須恵器が注目できる。本須恵器群には、白村江の戦い（六六三年）前後に用いられた須恵器坏蓋（小田Ⅴ期）が含まれる。また、後続型式の須恵器（小田Ⅴ～Ⅵ期）は主城原地区だけでなく、太宰府口城門地区や大石垣地区等の大野城各所で見出すことができる。大野城内の最高所（大城山山頂）で水城と尾根伝いに接続する毘沙門天地区は、軍事機能においても要所となっていたと見られ、出土土器量が多い。また、4,101点の土器に小田ⅣB期以前の土器が1点も確認できない点は重視でき、小田Ⅴ期の遺物量が少ないとは言え、存在すること自体に高い資料的価値が認められる。整備期と評価できる大野城Ⅱ期は、繕治（六九八年）・筑紫の役（七〇六～七一年）と重なり、遺物量が増加する。整備が一段落した大野城Ⅲ期の遺物量は、大野城全体で減少する。



図1 大野城跡・四王院跡の地区割

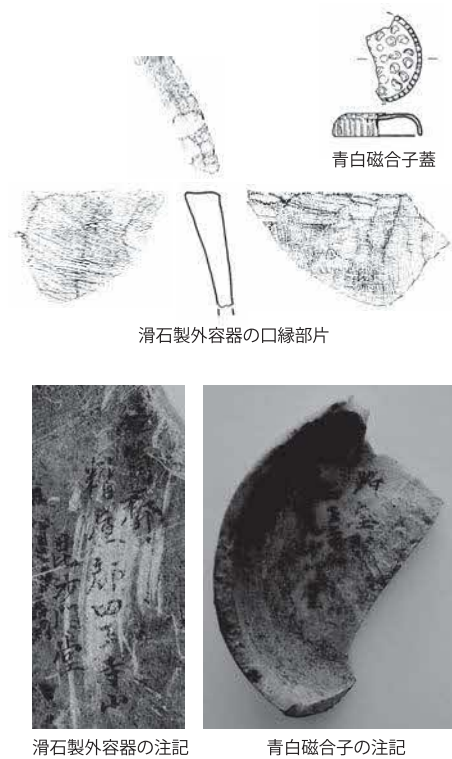


図2 滑石製外容器と青白磁合子 (S=1/4)
(九州歴史資料館蔵・田中幸夫コレクション)

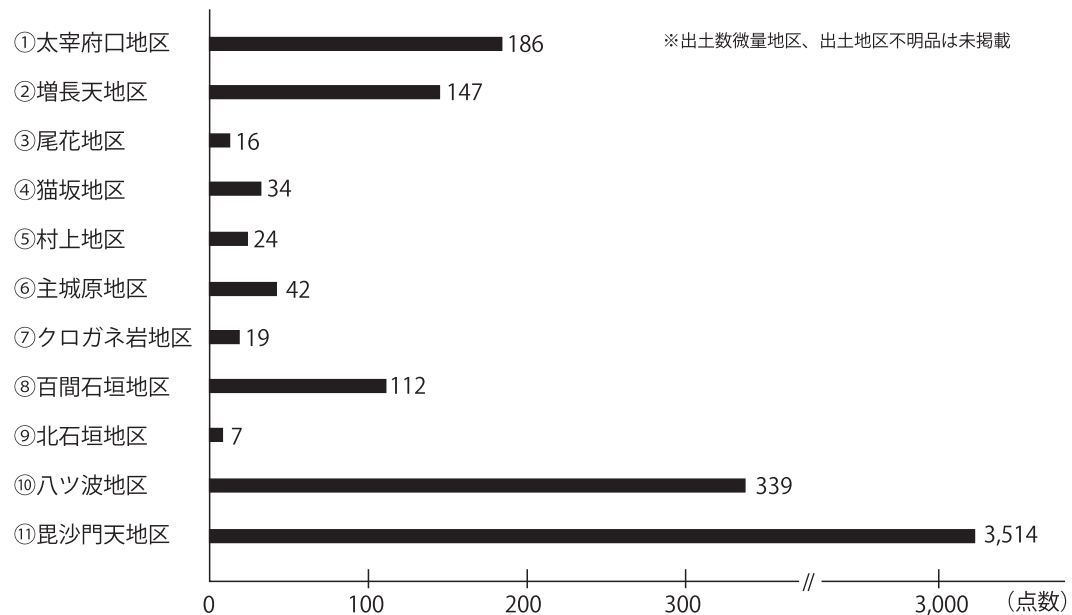


図3 大野城跡・四王院跡出土土器の総量 (九州歴史資料館所蔵品のみ)

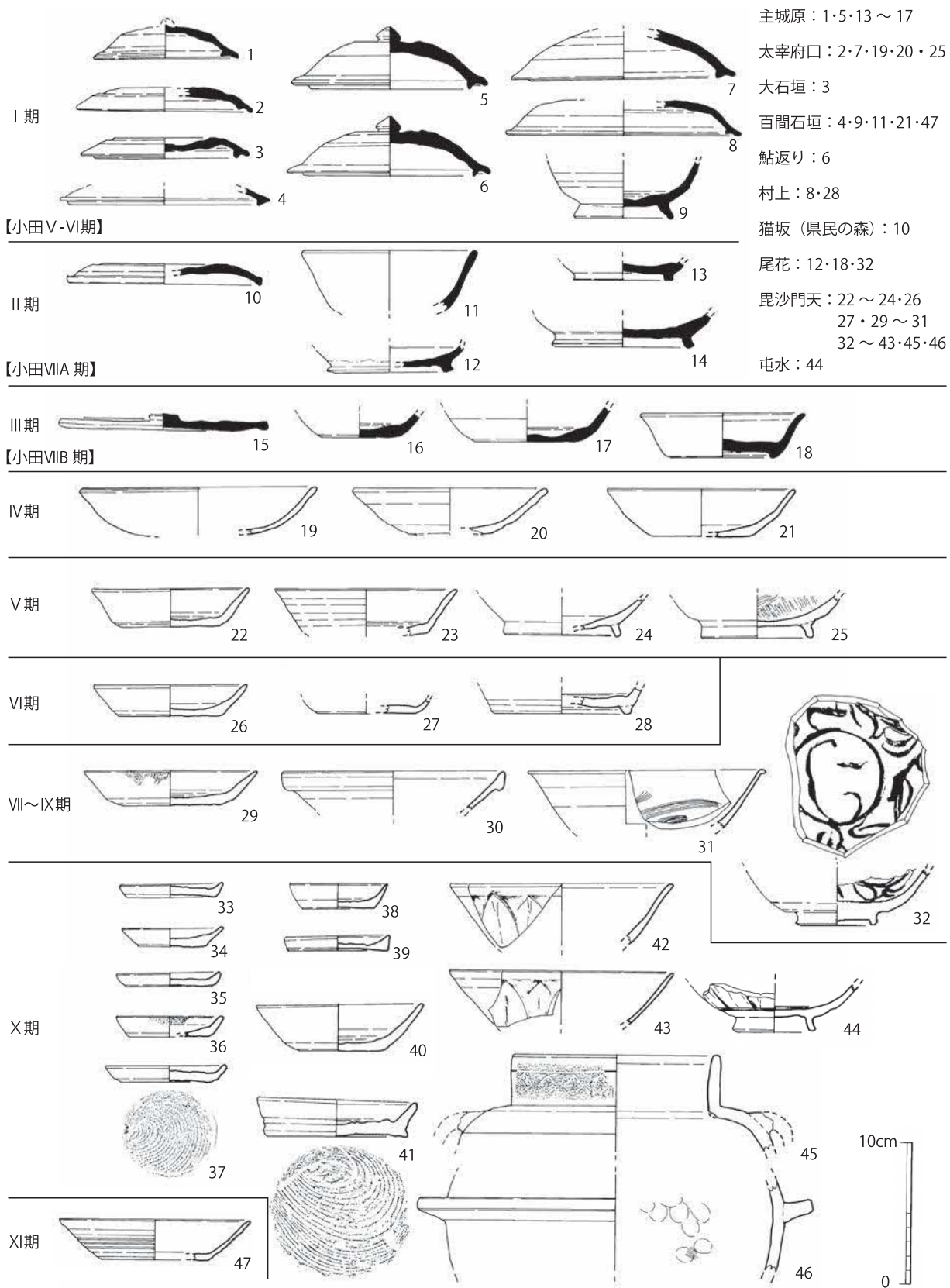


図4 大野城跡・四王院跡出土土器の変遷 (S=1/4)

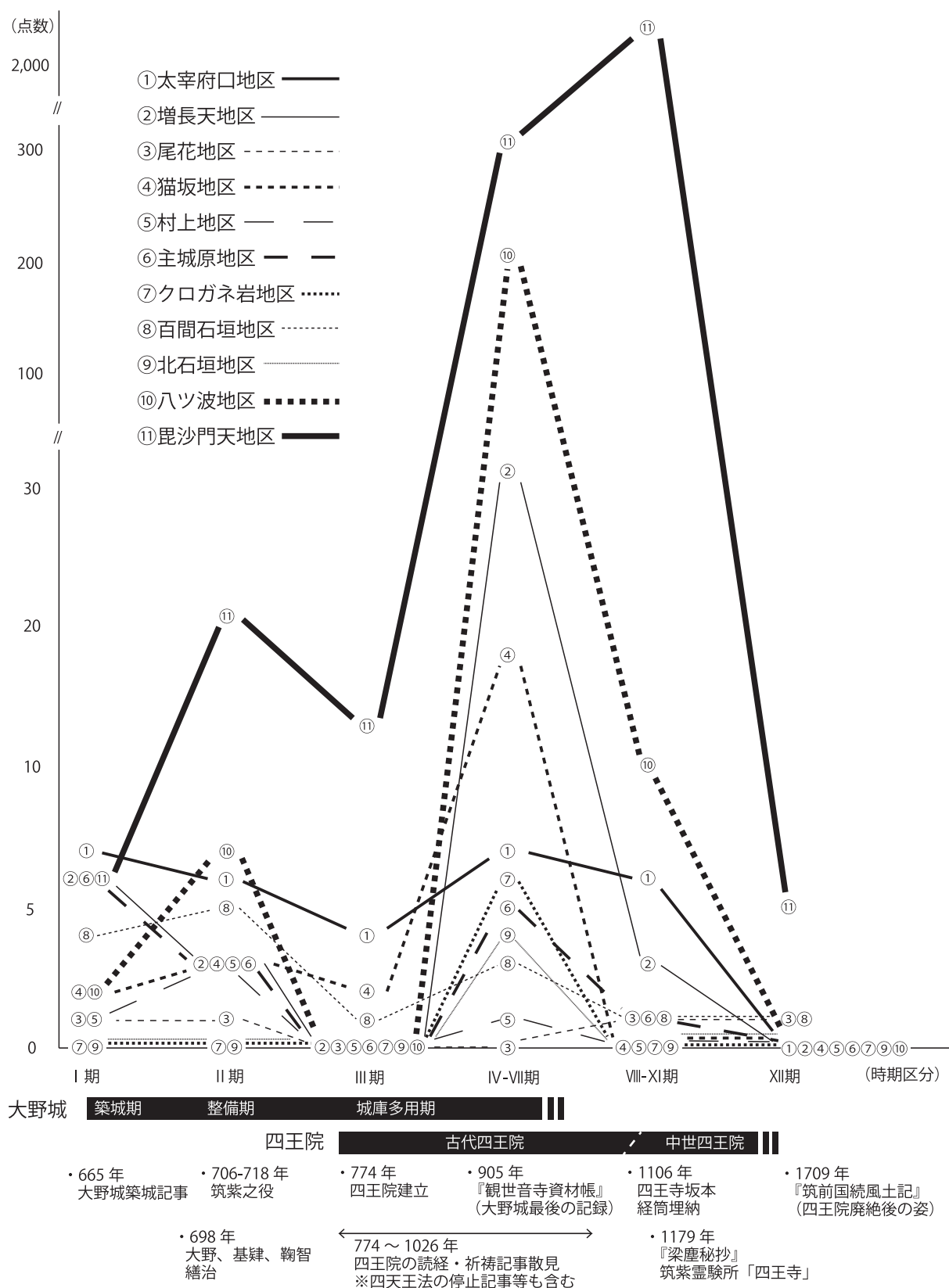


図 5 大野城跡・四王院跡出土土器の数的推移（九州歴史資料館所蔵品のみ）

出土土器から見た大野城の築城 出土土器の総量分析結果から、大野城土塁に囲まれた山頂域では、小田ⅣB期以前の土器の出土はなく、小田Ⅴ期より複数地点で土器の出土が認められ、小田Ⅵ期に土器出土量が増加することが分かった。小田Ⅴ期の暦年代比定という課題はあるが、記事②の大野城築城と親和性が高い分析結果である。また、外郭施設と内部施設出土土器に時期差がない点は、「高安城変遷モデル」とも整合する。

(五) 古代山城出土資料の二相

再整備型古代山城出土資料の解釈 鞠智城跡は古墳時代集落と重複することから、古代山城築城以前の遺物が多数出土する。次いで、土器出土量は小田Ⅴ期に微増し、小田Ⅵ期（六九八年、繕治）に増加する（木村二〇一六）。本分析結果は、鞠智城における「繕治」が重要な画期であることを示している。他の古代山城（女山古代山城等）でも、百済の役前に属する出土遺物が見られる場合があるが、鞠智城と同様に立地場所の標高が低く、古墳時代集落・墓域を内包すると把握されており、「再整備型」の古代山城とする分類案が示されている（木村二〇一六）。再整備型古代山城では、遊離資料を中心に資料の帰属が問題となる。

新規築城型古代山城の資料的価値 これに対し、大野城跡は土塁や倉庫群が建設された尾根上に古墳時代集落・墓域が営まれている「新規築城型」であることから、最古相の出土土器（小田Ⅴ期）がより鋭敏に古代山城築城時期（七世紀第三四半期）を反映していると評価できる。

大野城と鞠智城の比較では、「繕治」・「筑紫の役」による土器量

増加とともに、城庫多用期と見られる奈良時代（八世紀中頃）の土器量減少も共通する。古代山城整備時には多くの整備資材・人員が城内に入るが、整備後の運用初期段階においては、城庫とその周辺は守衛対象として厳重に管理されていたと解釈できる。

(六) 小結

国家が重要視した古代山城の築城年代 上記検討から、大野城の築城時期が小田Ⅴ期にあることを確認した。小田Ⅴ期はおおむね七世紀第三四半期の暦年代比定がなされているが、土器の型式編年のみでは、築城年代を白村江の戦い（六六三年）よりも「前か、後か」を決定することはできない（近江二〇一八）。現状の資料で踏み込めば、大野城Ⅰ期の土器群は小田ⅣB期の土器を含まないことから、小田Ⅴ期でも新相に位置づけられる。したがって、筆者は大野城の築城年代は、百済の役（六六〇～六六三年）を上限とする「後出説」を支持する。

二 倭政権の統治と外征

大野城跡出土土器の総量分析結果から、大野城の築城が小田Ⅴ期を上限とすることを確認した。本結果は鞠智城跡出土土器の総量分析結果と整合し、第Ⅰ段階の古代山城が小田Ⅴ期に築城されたことを示唆する。本点をふまえ、第Ⅰ段階古代山城の存立基盤である倭政権の統治実態について、古代山城が密集する九州北部を対象に検討する。

(一) 倭政権から見た筑紫嶋

国家領域観の偏重 「筑紫」の名は広義では九州全体を、狭義には筑前・筑後を合わせた地域を対象に用いられた。「筑紫」の定義の揺らぎは、『日本書紀』にも認められ、少なくとも記紀編纂が開始された天武・持統紀には存在した。加えて、筑紫国に配された筑紫大宰府の存在が象徴的に示すように、「筑紫嶋」という島名は、土地認識として九州北部に大きく偏る。同現象には、飛鳥時代における倭政権の国家領域観が強く反映されており、筑紫・豊を中心として、その外縁域を火・日向に収斂する構造がうかがえる（小嶋二〇二一）。本構造の起点には、宮がある畿内と韓半島南部を接続する「海西航路（瀬戸内海―響灘・玄界灘航路）」があり、同航路を幹線路として百済の役へといったる国造軍の動員、次いで古代山城群築城（防衛体制整備）がなされた（森二〇一九、小嶋二〇二一）。

(二) 筑紫嶋におけるミヤケ・評の実態

ミヤケ・評比定地 倭政権による筑紫嶋統治を象徴する初期の施設が、那津官家である。那津官家は『日本書紀』宣化天皇元年に「遐邇之所朝届、去来之所関門」である筑紫に整備された官家で、「筑紫肥豊三国屯倉」の穀を非常に備えて集積したと記録される。本官家の有力比定地が、博多湾沿岸の比恵・那珂遺跡群（福岡市）であり、三本柱柵列区画内から総柱建物群（倉庫群）が検出されている。筑紫君葛子が献上した糟屋屯倉も那津東岸に存在したと見られるが、同屯倉に直結する考古資料は見出されていない。間接資料として、糟屋屯倉に後続する糟屋評衛比定地の阿恵官衙遺跡（糟屋町）が確認されている（註2）。また、筑紫嶋内の評衙遺跡として、御原・

夜津評衛比定地の上岩田遺跡（小郡市）は最も解明が進んでいる。

比恵・那珂遺跡群（那津官家） 面的様相が分かる地点は、比恵8・72次調査区と比恵125次調査区で、倉庫群は六世紀後半（小田ⅢA期新相）を上限とし、七世紀第3四半期（小田V期）を下限として機能したと把握されている（図6）。久住猛雄氏の精査により、「区画溝を切る溝には、図示されていないが六世紀第4四半期後半の土器も流入し、かつ各溝下層には七世紀第4四半期の土器が出土するので、溝の掘削時期はⅥ期初頭頃」と絞り込まれており、倉庫群下限の有力根拠が積み上げられている（久住二〇二三）。倉庫群の上限については、六世紀第3四半期（MT85型式期）を上限とするため、現状ではミヤケ遺構は『日本書紀』宣化天皇紀の官家設置時期よりも後出する（久住二〇二三）。

物資搬入痕跡としては、古墳時代後期とされる牛馬歩行痕跡（比恵112次調査区）や、壺・甕類に多く見られる搬入土器が挙げられる。また、那珂23次調査区では、九州最古相の瓦類（神ノ前タイプ・月ノ浦タイプ）が複数出土しており、方形区画（約一一五m×約九〇m）内等に瓦葺建物が存在したと見られる。神ノ前タイプの瓦は、後に大宰府が置かれる二日市地峡帯北端の牛頸窯跡群で生産されており、福岡平野を縦走する南北路により物資搬入がなされていることが分かる。

阿恵官衙遺跡（糟屋評衙） 古墳時代後期の前方後円墳・鶴見塚古墳の隣接地に営まれた官衙遺跡である（図8）。官衙域は東側に正倉、西側に政庁が配される。政庁は新旧二つの遺構が重複しており、古段階の政庁は小田V期を上限とする（西垣二〇二三a）。

新たに発見された大型竪穴建物（阿恵1期・小田V期）は、後述

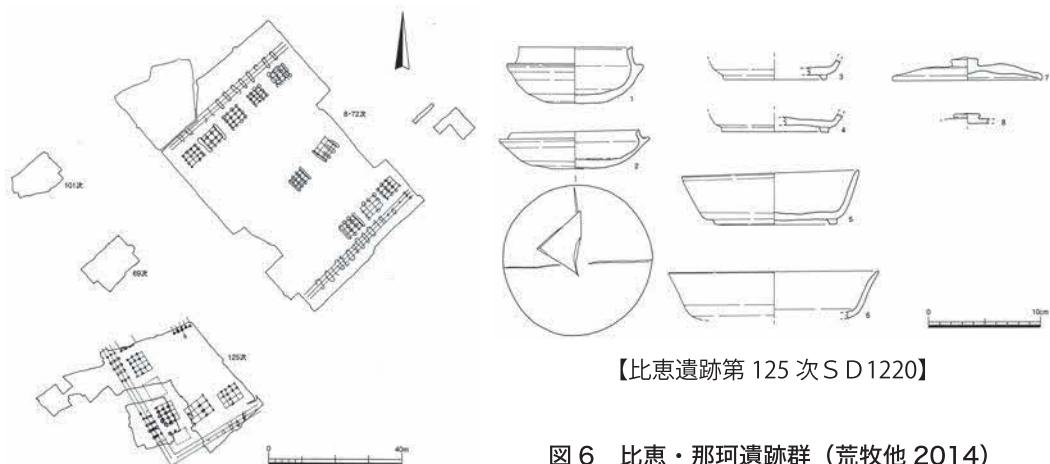


図 6 比恵・那珂遺跡群（荒牧他 2014）

			7C前半	7C中頃	7C3/4(Ia)	7C4/4~8C1/4(Ib)	8C中頃(II)	8C後半(III)	9C前半(IV)
上岩田遺跡	Ga区	竪穴建物							
		大型建物群(詳細)			■■■■■				
		基壇建物			□□	678年倒壊			
	Gb・Gc区	原形相当建物群							
		竪穴建物							
		側柱・廻柱建物							
小郡官衙遺跡	A区	官衙風建物群							
		倉庫							
井上廃寺	I期								
	II期	コの字型配置 群序							
	III期								
下高橋官衙遺跡									

図 7 御原郡における官衙関連施設の変遷（山崎 2022）

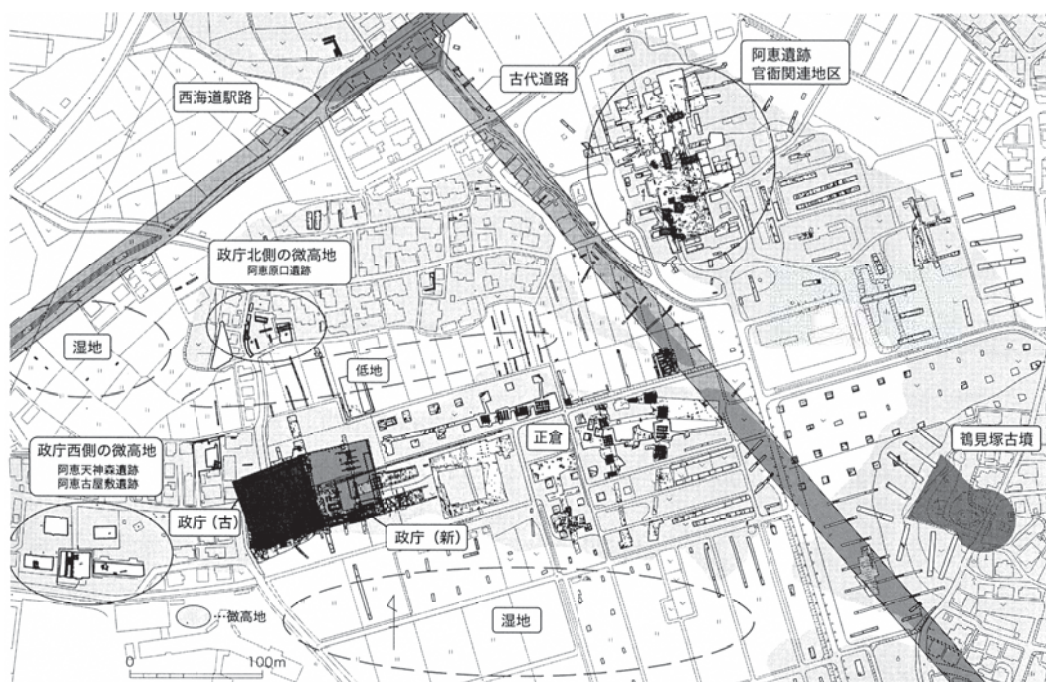


図 8 阿恵官衙遺跡周辺（西垣 2023b）

する上岩田遺跡の大型竪穴建物と同規模のものであり、初期評衙間で類似した遺構の存在が確認された（西垣二〇二三b）。また、鶴見塚古墳と阿恵官衙遺跡の間には、西海道駅路から大野城方向（南

東方向）にのびる古代道道路が検出されている。本道と接続する場所に正倉が位置する。

上岩田遺跡(御原・夜津評衙) 上岩田遺跡は評衙域と首長居宅域が面的に調査されている。評衙中央の基壇建物は天武七年(六七九年)の筑紫国地震により倒壊しており、六七九年以前の評衙整備が確定する(松田二〇一四)。基壇建物の瓦は大和・山田寺系に連なるため、山田寺創建年(六四三年)よりも後出することが確定でき、出土土器の様相から小田Ⅴ期に位置づけられる(図7)(山崎二〇二二、山崎他二〇二三)。基壇は掘り込み地業を経た後に、版築盛土により成形されている。水城・大野城等の古代山城を除くと、筑紫嶋での版築盛土では最古級的事例となる。

隣接する首長居宅域(六七九年以前)では、中央に一辺10mを超える大型竪穴建物、その東西に総柱建物群(倉庫群)と側柱建物(六間×四間)が配されており、一般集落とは隔絶した遺構組成が認められる。

(三) ミヤケに繋がる道

筑紫縦貫道 ミヤケへの物資集積、労役・兵役の徴発を物理的に実現するものが交通路である。前稿では、その基幹路として、筑紫国と火国(肥後)を南北に貫く「筑紫縦貫道」の存在を主張した(図15)(松村一九九四、高木二〇二二、小嶋二〇二二)。本路の成立については、筑紫君・筑紫国造の本拠地である八女領域の開発・物流の検討から、古墳時代中期後半以後、とくに岩戸山古墳築造がなされた古墳時代後期前半が画期となることを論じてきた(小嶋二〇二三a)。

筑紫縦貫道の要所「鞍轡尽しの坂」 筑紫君・火君による交通路の形成を示す史料が『筑後国風土記』逸文である。

「筑後国の風土記に云はく、筑後国は、本、筑前国と合せて、一つの国たりき。昔、此の両の国の間の山に峻しく狭き坂ありて、往来の人、駕る所の鞍轡を摩り尽されき。土人、鞍轡尽しの坂と曰ひき。三に云はく、昔、此の堺の上に龜猛神あり、往来の人、半ば生き、半ば死にき。其数極く多なりき。因りて人の命尽の神と曰ひき。時に、筑紫君と肥君等之を占へて、筑紫君等の祖の甕依姫を祝と為して之を祭らしめき。爾より以降、路行くの人、神に害はれず。是を以ちて、筑紫の神と曰ふ。」

本史料では、後に筑前・筑後の国境となる「坂」に坐す龜猛神を筑紫君・火君等が鎮め、坂の往来が安全に果たされたと記される。

遺跡動態に基づく「鞍轡尽しの坂」の成立と道程 筑前・筑後・肥前の境界となる三国丘陵(福岡県小郡市周辺)を対象に、弥生・飛鳥時代の遺跡動態を検討すると、古墳時代中期以前の集住地は丘陵裾にあり、古墳時代後期以後に丘陵地開発が本格化することが分かる(表1)。本動態を象徴的に示すのが最上位首長墓の立地であり、古墳時代中期後半段階の首長墓は横隈山(宝満川沿い南北路)、後期後半段階の首長墓は五郎山(脊振山地側南北路)に築かれる(図9・10)。つまり、古墳時代における脊振山地側南北路の開通時期は、古墳時代中期後半(小田ⅠB期)と古墳時代後期後半(小田ⅢB期)の間に絞り込め、本開通により生じた社会的価値から五郎山古墳の築造地点が定められたと把握できる。この脊振山地側南北路が「鞍轡尽しの坂」であり、筑紫神社を通過する長崎街道(三国坂)との道程重複が有力視できる(図11～14)。

表1 三国丘陵周辺における遺跡動態

丘陵名	遺跡名	種別	弥生後期	古墳前期	古墳中期	古墳後期前半	古墳後期後半	飛鳥
永岡丘陵	諸田仮塚・仮塚南	墓域				馬埋葬土坑群・埴輪樹立墳（埴輪Ⅳ群A類→Ⅴ群系）		地震痕
	永岡・鳥井本	集落・官衙等			牧？	集住・牧？		
筑紫丘陵	矢倉・以来尺	墓域					筑紫型	
	前畑	集落・官衙等		環濠集落		焼失住居	墓域隣接地に集住	土壘
筑紫丘陵	原田（原田宿）	墓域				北九州型→筑紫型A類（最上位首長墓内包）		
	五郎山	集落・官衙等			単独住居		水路	
筑紫丘陵 三国丘陵	隈・西小田	墓域	甕棺墓・土坑墓	前方後円墳3基（埴輪）	北九州型		筑紫型・横穴墓・土坑墓群	
	津古	集落・官衙等		津古周辺に集住	初期須恵器窯	竪穴建物数小田ⅣA期増加→ⅣB期減少		
三国丘陵	三国の鼻	墓域		前方後円墳1基			筑紫型	
		集落・官衙等		環濠集落		両筑平野を見下ろすように集住		
三国丘陵	横隈	墓域		前方後円墳1基（埴輪Ⅳ群A類）	初期横穴墓	筑紫型・筑後型・横穴墓・土坑墓		
		集落・官衙等				鉄鍬出土量が突出して多い集落・牧？		
三国丘陵	効又	墓域				筑紫型・筑後型（釘付式木棺多い）		
	三沢	集落・官衙等				須恵器窯（小田ⅢB～ⅣA期）		
三国丘陵	花嶺	墓域		板状鉄斧→三角板革綴短甲・短頸鍬群				
	西島・伊勢山	集落・官衙等		九州導入期の滑石工房と祭祀				
三国丘陵	大塚・小浦	墓域					北部九州型→筑紫型	
	白坂（白坂宿）	集落・官衙等					調査区内7軒ほどの集落	
三国丘陵	千塔山	墓域			北部九州A型→北部九州C型・埴輪Ⅳ群系			
	八幡	集落・官衙等		環濠集落				
脊振山系	基肄城	墓域						
	関屋土壘	集落・官衙等						古代山城・土壘

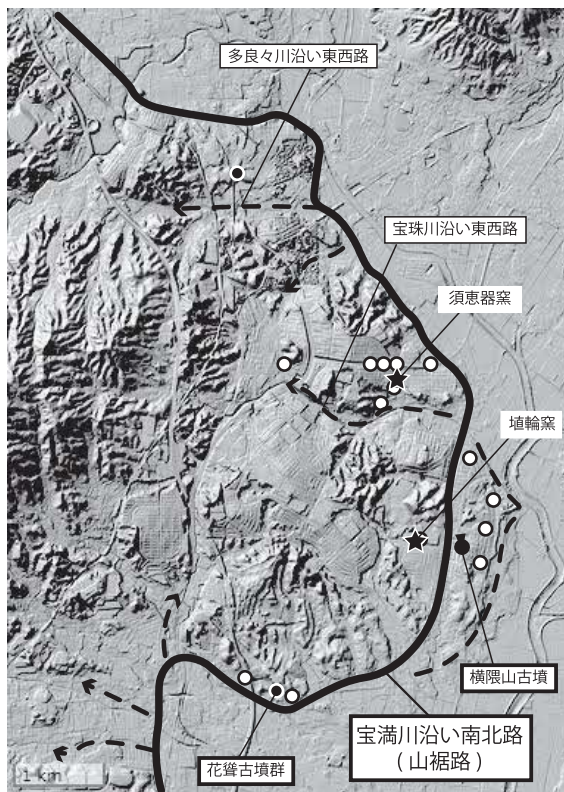


図9 古墳時代中期の推定交通路

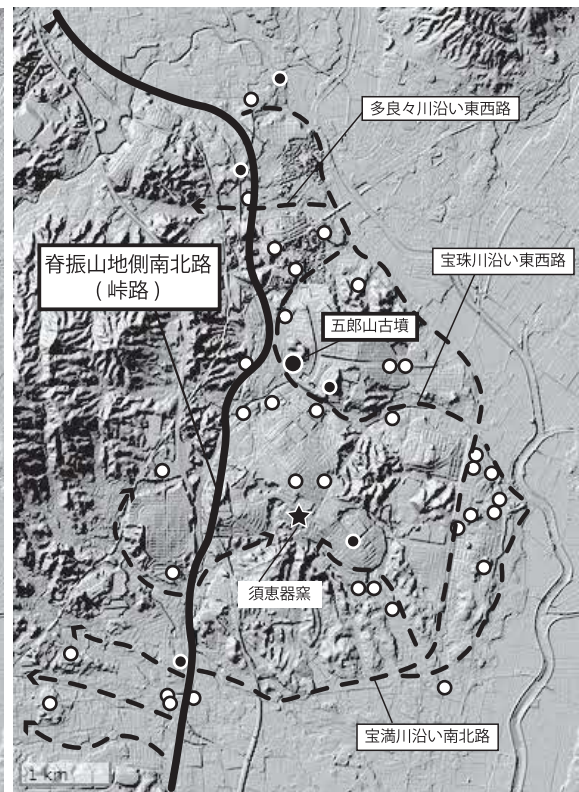
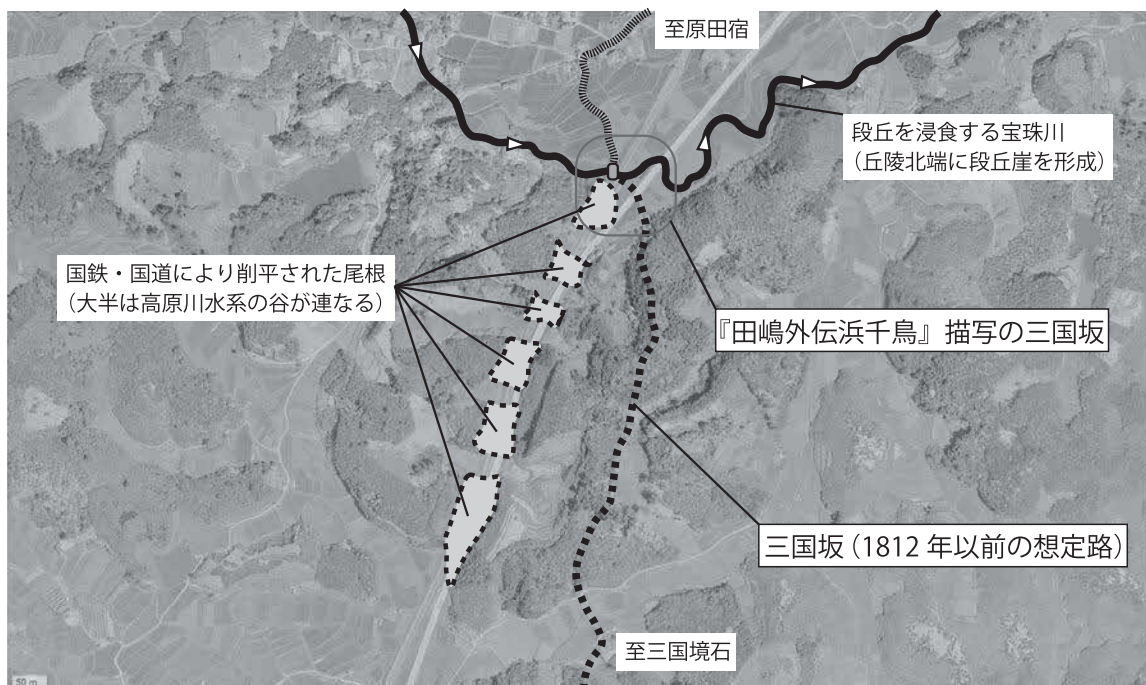


図10 古墳時代後期の推定交通路



『田嶋外伝浜千鳥』描写の三国坂は、宝珠川の河川作用で形成された段丘崖を往来するための急峻な坂を指す。広義の「三国坂」は、原田宿から白坂宿の間に横たわる低丘陵の往来路と認識されていた。本往来路は高原川・宝珠川水系の河川作用で形成された谷の上り下りを避けるため、谷を見下ろす形で尾根上（三国丘陵西端）を縦走していたと見られ、本路上（尾根線上）に「三国境石」が配されている。

図 11 1960 年代の空撮（国土地理院地図）で見た三国坂



図 12 『田嶋外伝浜千鳥』描写の三国坂



文化九年（1812 年）以前の長崎街道は、三国丘陵西端の尾根稜線をたどるように蛇行する。『小春紀行』には、「小坂なれども登る所急なり」（1805 年の旅程）と記される。

図 13 三国境石の脇を通る古長崎街道



宝珠川渡河地点より先は、国鉄（現 JR）線路・国道により削平される。尾根断ち割り法面で、本来の傾斜角度（最大 30 度）を偲ぶことができる。

図 14 『田嶋外伝浜千鳥』描写の三国坂削平部

(四) 筑紫嶋の外征軍動員路

「鞍轡尽しの坂」が社会的に重要視された古墳時代後期～飛鳥時代は、百済の役を筆頭に、倭政権の主導により多くの人的資源・物資が韓半島に投下された時代である。その中核を担ったのが筑紫嶋の諸豪族であり、「鞍轡尽しの坂」を含む北上路が動脈の役割を担った。筑紫嶋の北上路は、遺跡動態を根拠として西側から順に五つの路にまとめられる(図15)。

九州西部航路 有明海・八代海・大村湾の三つの内海を内包した航路で、筑紫嶋西端を通航する。古墳時代中期には、「有明首長連合」の通航路として、有明海沿岸域と韓半島・西日本各地を繋いだ(柳沢二〇一四等)。古墳時代後期においても、阿蘇凝灰岩製石棺の輸送という事実から、高い輸送能力とともに倭政権への貢納を実証する。また、横穴式石室の埋葬空間設計では、「西北九州系」と称される長羨道石室群が本航路沿いに分布しており、各集団間の繋がりを物語る(藏富士二〇二〇等)。一方で、飛鳥時代後半の戦時防衛体制下で倭政権が重要視した形跡は乏しい。

松浦回廊(笹原峠越え) 脊振山系西側を縦走する南北路で、有明海沿岸域北西側と玄界灘沿岸域(唐津湾沿岸域)をつなぐ。渡来系遺物の出土で知られる土生遺跡を代表例として、弥生時代より利用されてきた南北路である。古墳時代後期には有明海沿岸域を発信源とする独立立柱石・二重側壁を用いた石室群が南北に展開する(小松一九九九)。

筑紫縦貫道(藤山道・鞍轡尽しの坂) 脊振山系東端・二日市地峡帯を縦走し、玄界灘沿岸域(博多湾)と筑紫平野を通航する。本路と筑紫君の結合を象徴する遺跡が岩戸山古墳であり、同墳の築造

は広川・福島低地の灌漑機構整備・八女丘陵裾部の開発と連動する(小嶋二〇二三a)。また、古墳時代中期後半～後期後半にかけては、古墳築造技術として「①押圧技法をもつⅣ群・Ⅳ群系埴輪」、「②穹窿状天井石室群(筑後型・肥後型)」、「③複室の埋葬空間設計(複室Ⅱ類)」、「④装飾壁画」、物資流通として「①八女系須恵器」・「②八女系土師器」が、菊池川中流域・矢部川流域・広川流域・筑後川下流域を連ねるように南北に分布し、在地豪族主導の生活基盤(インフラ)整備を物語る(木村二〇一三、中嶋二〇二〇、藏富士二〇二〇、小嶋二〇二〇)。また、『日本書紀』記載の筑紫君葛子による糟屋屯倉献上も、筑紫君による筑紫平野と福岡平野の接続を物語る。

遠賀川 筑紫国・豊国の境界域を北流する大河で、河口域に広い潟地形(遠賀潟)を形成する。同流域は盆地地形が連なる地勢であり、遠賀川自体が各生活圏を連ねる動脈の役割を歴史的に果たしてきた。古墳時代後期における河川交通の輸送能力を実証するのは、遠賀川川底(飯塚市)で見出された阿蘇凝灰岩製石棺があり、遠賀川を遡上する重量物の運搬が認められる。また、遠賀川上流域には穂波屯倉・嘉麻屯倉、遠賀川河口域では「鉄器生産の村(尾崎・天神遺跡等)」が連なっており、古墳時代後期より倭政権への貢納を広域で担った。なお、遠賀川上流域は後に豊前路(大宰府と豊前国府をつなぐ小路)として整備される東西路が横断するが、本路の母体となる峠道は古墳時代後期より機能していたことは複数資料(石室・横穴墓・土師器等)から裏付けられる(小嶋二〇二二)。また、遠賀川本流に沿う南北陸路も通時的に存在したと見るべきであり、官道としては「鞍手路」の候補の一つとなっている(木本二〇一六)。

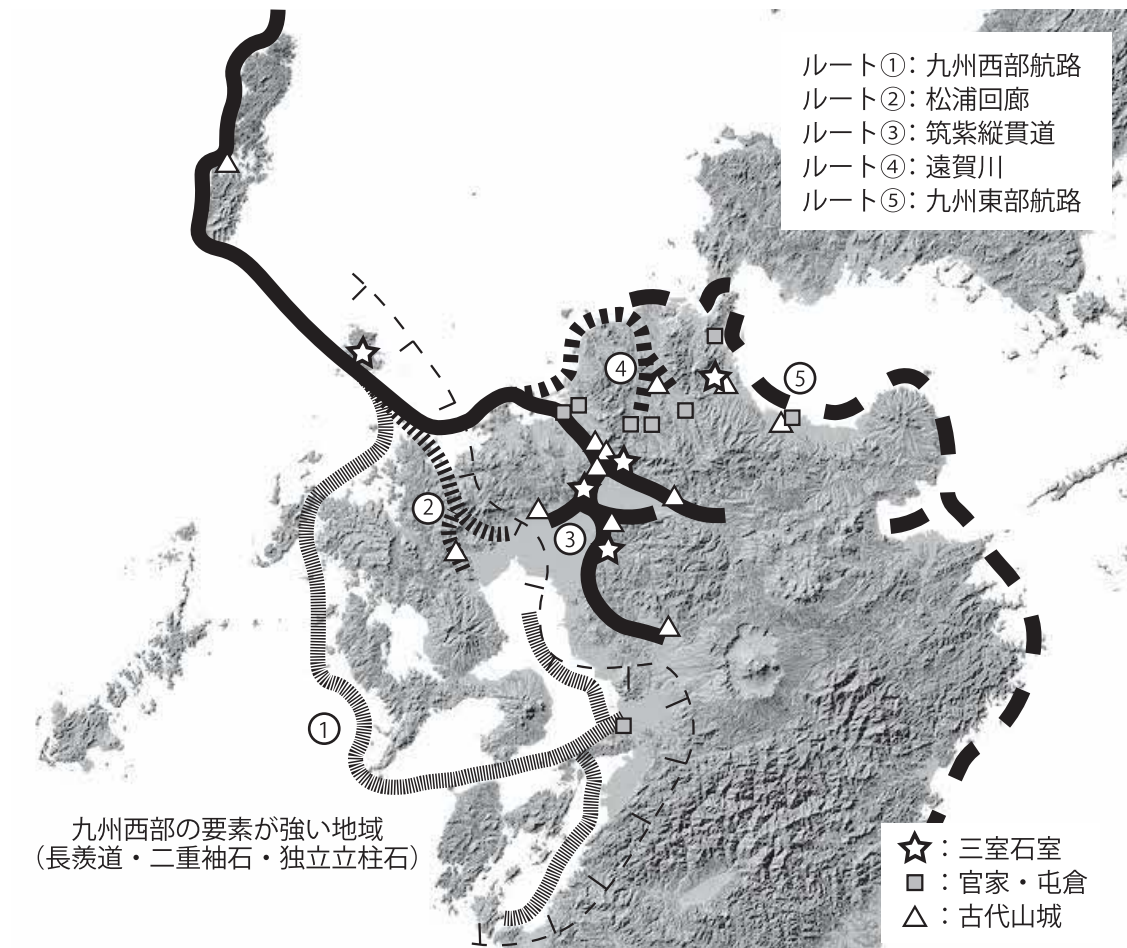
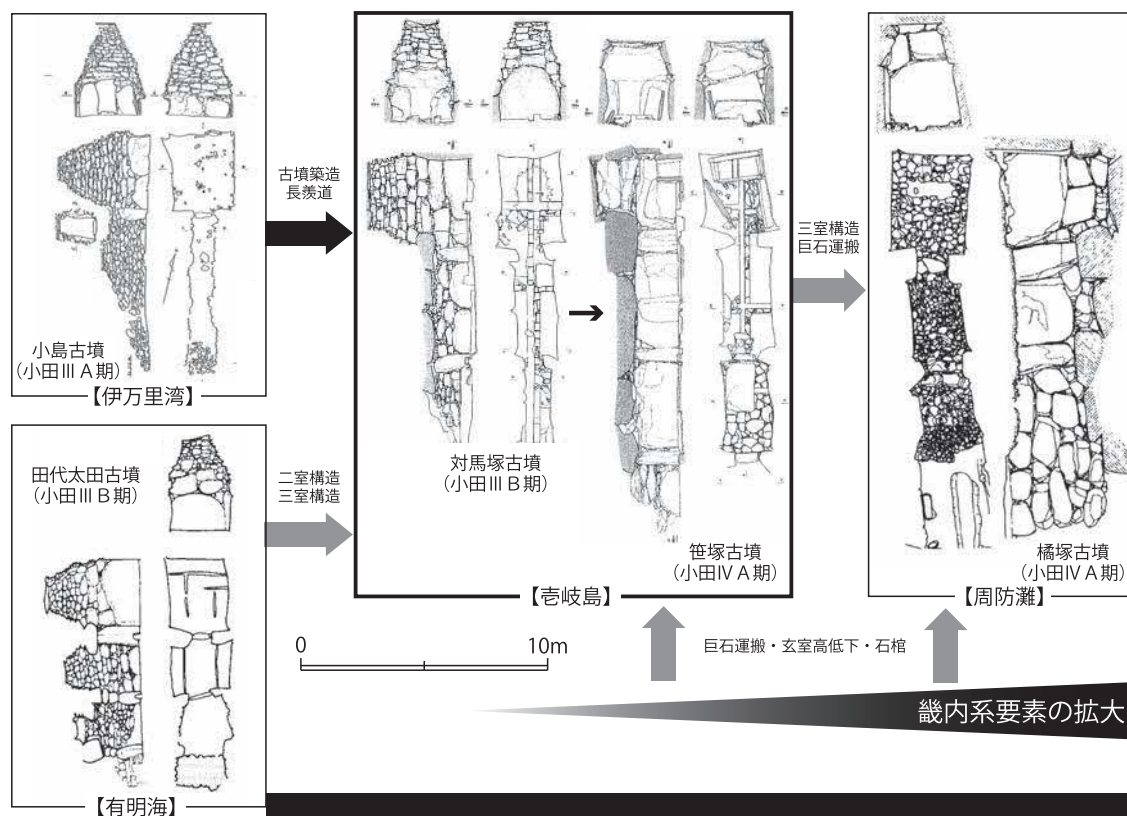


図 15 九州北部を北上する5つの路



九州東部航路 筑紫嶋東部端を通航した航路で、周防灘沿岸域では陸路と並走する。古墳時代前期より沿岸域に大型前方後円墳が築造されており、九州東部航路は歴史的に形成されてきた生活基盤であった。同航路沿いでは、古墳時代中期後半以後は横穴墓、古墳時代後期後半には畿内系石室が連鎖的に分布する現象が見られる。周防灘沿岸域は瀬戸内海航路の西端基点であり、巨大な内湾（古京都湾）を擁する京都平野は、西日本有数の人口密集地であったことが群集墳・横穴墓群の築造数からうかがえる（宇野二〇二二）。また、肝等屯倉を筆頭に複数の屯倉候補地が連なるのも、同地が倭政権を構成する重要地域であったことを物語る。

（五）小結

倭政権の統治痕跡 第1段階古代山城（小田Ⅴ期）の存立基盤である倭政権の統治実態を探るため、文献史料と考古資料を検証した。倭政権による筑紫嶋統治の最重要拠点である那津官家は、小田ⅢA期新相（『日本書紀』宣化天皇元年よりも後出）に成立し、小田Ⅴ期まで維持される。資料蓄積が進んだ結果、那津官家の終焉は、百済の役を経たⅠ期大宰府政庁の成立と連続する蓋然性がさらに高まった。

解明が進む阿恵官衙遺跡・上岩田遺跡の事例から見て、筑紫嶋の評衙整備は小田Ⅴ期を上限としており、孝徳紀の天下立評よりも百済の役後に画期がある。本現象は天下立評の否定を決定づけるものではなく、天下立評の痕跡が「評衙遺跡」としては認められない点をここでは確認しておきたい（図17）。

遺跡として那津官家が確認できる小田ⅢA期新相以降は、那津で

の物資集積を実証的に認めることができる。那津官家は宮と韓半島をつなぐ海西航路と、筑紫嶋内陸部の基幹路である筑紫縦貫道が交わる場所に配された（図15）。倭政権は筑紫君を国造に任命することで、「鞍轡尽しの坂」を内包する南北路の機能・恩恵を実質的に掌握したと評価できる。

筑紫嶋内陸部の人的資源・物資を国家運営に投入する構造（国造制と那津官家）が、「筑紫」に偏った国家領域観の主要形成要因である。本構造は戦時防衛体制にも直接的に反映されており、筑紫縦貫道は南北の要所で水城・小水城、とうれぎ土塁・関屋土塁、上津土塁が塞ぎ、大野城・基肆城・高良山古代山城・女山古代山城が見下ろす。鞠智城は本道南方の拠点施設として位置づけられる。

三 国造軍動員と労役

筑紫嶋北上路は、東は瀬戸内海航路を通じて大王の宮、西（北）は壱岐海峡・対馬海峡を通じて韓半島へと到達する。倭政権の政略的視点、動員路という視点に立てば、東の宮へは「上番・貢納」、西の韓半島へは「兵役」を第一義とした交通路となる。とくに韓半島への渡海において、壱岐島は五つの路が集束する要地である。同島における大型古墳（対馬塚古墳等）・群集墳造営が小田ⅢB～ⅣA期に集中する現象は、韓半島への軍事動員と連動する現象として理解されている（小田二〇二一・二〇二三、田中二〇一二a、b、林二〇二一、広瀬二〇一三、藤田一九九二、宮本編二〇一八等）。筆者も同様の見解をもつが、本節では軍事動員（兵役）と古墳築造（労役）が連動する構造的な理解と派生する現象について追究する。

(一) 国造軍の命令系統・進軍方式・軍備

国造軍の軍事体系 小田ⅢB～ⅣA期における軍事動員を実現する体系とは、「国造軍（国造が編成・指揮する軍隊）」に他ならない。この国造軍の構造追究が、軍事動員と古墳築造の連動という現象を理解する唯一の手段である。

国造軍の動員権限は、倭政権中枢の大王にあり、将軍に任命した皇族や物部氏・大伴氏等の中央豪族より、各国造に向けて「軍事目的・兵数・集結地点・集結期日」等が要請されることになる。国造は要請に従って軍事動員を行うが、国造軍の中核は同族集団とその部曲である。指揮具を除く、各兵士の装備は自弁であり、兵站を大きく見積もっても、各国造単位で確保したと考えざるを得ない。国家的備蓄分、すなわちミヤケに蓄積した物資は、国造軍運用にも利用される物資ではあるが、国造軍を束ねる将軍の要請に応じて支給される物資であり、本拠地から集結地点に向かう国造軍への恒常的支給を担うものではない。百濟の役の際、宮自体が西下したのは兵員確保とともに、国家的判断（国家的資源の投下）を短期間で対処的に決定する必要があるためである。

国造軍の進軍 国造軍は、要請期日に間に合うよう集結地点に向けて進軍するが、本進軍の責任は各国造が担うことになる。進軍する際の航路（港）の利用や駐屯地の確保（水・物資補給）等の実務は、各国造の差配に依るところが大きい。つまり、国造軍の進軍は、古墳時代を通じて歴史的に培われてきた豪族間の協力関係が基層に存在する。進軍路が集束する九州北西岸や壱岐島での港の利用・駐屯地確保を円滑に行うには、同地の諸集団を主導する豪族（壱岐島造等）との協力関係を個別に取り結ぶ必要があった。また、「対馬島～壱岐島（対

馬海峡）」間に比して、「壱岐島～九州北西岸（壱岐海峡）」間は相互視認性が高く、後者での国造軍集結率は高かったと想定できる。

(二) 豪族間の協力関係と古墳築造

協力関係の痕跡 豪族間の協力関係は複数分野におよぶと見られるが、遺跡として我々が認識できる最たる痕跡が「古墳」である。古墳は上位階層墓となる大型墳ほど、遠隔地の要素や複数集団の要素を内包する頻度が高く、他豪族との接触・技術保有者の往来がなければ成立し得ない現象が頻発する（小嶋二〇二二）。大王墓造営による幾重もの古墳築造技術の列島の波及（大造墓秩序）は、大型墳造営に複数集団が参集していたことと同義であり、本動員構造を模倣する形で各地の豪族も独自の中造墓秩序を構築した。

壱岐島の古墳築造 壱岐島を統率する壱岐嶋造も、島内に独自の中造墓秩序を小田ⅢB～ⅣB期という限られた期間に構築した。古墳造営に投下する労働力の基軸は壱岐島居住集団（移住集団内包）であるが、本動員を支える人員・物資供給に、豪族間の協力関係があったと見る。島外からの人員・物資供給が短期間に集中する歴史的契機とは、従前の指摘通り、韓半島への国造軍の派兵に他ならない。古墳時代の軍事動員である「同族集団・部曲の動員」は、『古事記』・『日本書紀』で確認できる古墳築造動員体系と同一軸であり、労役と兵役が転化されやすい構造であったことが記紀には記されている（註3）（小嶋二〇一八）。

壱岐島の造墓秩序と外的資源 壱岐古墳群内の大型墳は内陸立地（島内南北路沿い）が基軸で、臨海性を有するのは対馬塚古墳に限られる。したがって、島外に向けた示威性よりも、島内での造墓秩

序形成に重点をおいた古墳立地と評価できる。六世紀後半に前方後円墳の大型化が見られる沱岐等の地域では、「在地の有力な豪族の下に、民族的な秩序の下に生産組織が編成されている、在来の秩序の下で地域の支配が行われている」と理解する（辻田二〇二三）。つまり、沱岐島内での在来秩序内に外来技術と外的資源が取り込まれる構造であり、その契機として、①倭政権の政策（国造軍派兵）、②物部氏等の中央豪族との従属関係、③豪族間の協力関係の三要因が重層すると考えられる。

（三）沱岐島の古墳築造技術

沱岐島の古墳を構成する要素 小田ⅢB期にはじまる沱岐島での大型墳築造は、対馬塚古墳を端緒としており、本墳の古墳築造範型が島内全域の群集墳にも投影されている（図16）。対馬塚古墳の祖型は、九州本島の西部域に広がる石室群（西北九州系石室）であり、筆者分類では筑紫型長羨道単室Ⅰ類の型式変化上に位置する（藏富士二〇二〇、小嶋二〇二一等）。沱岐島の大型墳に採用された三室構造は、最古例が有明海沿岸域（筑紫縦貫道沿い）の田代太田古墳であり、同要素も九州本島に起源がある（吉村二〇〇〇）。沱岐島の古墳を構成する基本軸は、九州在来の豪族により培われてきたと言ってよい。一方で、家形石棺や利用石材の巨石化という要素が畿内型石室から持ち込まれたとの評価は妥当であり、玄門・前室・羨道天井が同一レベルに並ぶのも畿内型石室の要素と共通する（小田二〇二一、広瀬二〇二三）。

（四）国造軍進軍と古墳築造技術の共有

沱岐島を結節点とした繋がり 沱岐島の大型墳（笹塚古墳等）に特徴的な三室構造や広い前室構造は、石室空間設計という峻別しやすい属性であるため、同島を起点とした古墳要素の広がりとして注目を集めてきた（図15・16）（吉村二〇〇〇、広瀬二〇一三）。同特徴が瀬戸内海西端の重要拠点・人口密集地の京都平野で共有される現象は、まさしく国造軍動員との連動を想起させるものである（宇野二〇二二、広瀬二〇二三）。ただし、埋葬空間設計の採用は各集団の主眼的判断で造墓秩序に組み込むものであるため、三室構造は沱岐嶋造と協力関係を築いた豪族の一部で用いられたと評価でき、全体像を反映するものではない。また、沱岐島の古墳築造範型の祖型となった九州北西岸の要素（長羨道石室Ⅰ類）も小田ⅢBⅣA期に飛び地的に伝播しており、三室構造の飛び地的伝播と同様の現象として理解できる。

畿内系要素の広がり 沱岐島の大型墳に見られる「急速な巨石化」も重要な現象である（広瀬二〇二三）。飛鳥時代における巨石化現象は日本各地に広がっており、九州島も例外ではない。九州島における巨石化には二つの動態があり、一つは沱岐島と同様に畿内型石室を起点とした巨石化、もう一つは有明海沿岸域で成立した横口式石棺・石屋形を起点とした巨石化（宇土型石室・肥後型石室）である（小嶋二〇二一）。二つを複合する事例もあるが、石室の型式変化を重視すると、九州全域に影響を与えているのは前者の畿内型石室である。沱岐島の古墳築造における巨石運搬技術の発達も、豪族間の協力関係を媒介として、九州各地における畿内系要素の拡大を促進した見られる。

(五) 小結

孝徳紀天下立評の痕跡 軍事動員と古墳築造における動員体系の重複は、各豪族による軍事力・労働力の私的運用と直結する。むしろ、公的・私的という区別自体が未成立な動員体系であることが、古墳時代後期における国造軍の構成要素であった。本点をふまえると、沓岐島における大型古墳の築造停止（小田ⅣB期）は、倭政権による軍事力の私的動員抑止が最も鋭敏に反映された現象の一つと評価できる。また、小田ⅣB期は沓岐島だけでなく、筑紫嶋でも「氏族的結合と生活圏・墓域を維持しながら、居住域や灌漑機構等の生活基盤が変動し、造墓活動を縮小する」という現象が同時多発的に生じている（下原二〇一六・小嶋二〇二三c）。豪族独自の大規模動員が抑止されたことで、地域の生活基盤を整備していた動員体系も変質せざるを得ず、氏族的結合・生活圏の基軸は維持しながらも、新たな社会秩序（評）の形成が始まったと理解する。また、造墓活動についてより軍事面に目を向ければ、小田ⅣA期の盛んな造墓活動（新式群集墳）は各種武装を中心とする膨大な副葬行為を伴っていた。小田ⅣB期の造墓活動縮小により、動員・墓域制限だけでなく、副葬行為も縮小した。制限法としての薄葬令は、列島規模で軍事物資の蓄積を図る契機になったと理解できる。飛鳥時代に製作され、律令期に引き継がれた大宰府備蓄兵器も小田ⅣB～Ⅴ期の製品を上限としており、薄葬令は兵器の長期保管・運用の転換点としても評価できる（小嶋二〇一四）。

四 国造軍の成立と終焉

「倭政権による筑紫嶋統治と外征」・「国造軍動員と労役」につい

ての検討をふまえ、遺跡動態という物証を積み上げながら、古墳時代中期後半から飛鳥時代の兵制をまとめる（図17）。

(二) 杖刀人と国造軍

杖刀人と上番 国造軍成立前における倭政権の確実な軍事組織は、埼玉稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣から読み取れる「杖刀人首―杖刀人」である。埼玉稲荷山古墳の被葬者と見られる「ヲワケ」は杖刀人首に就いており、同組織の構成員には、大王の宮に出仕した地方豪族が含まれている。江田船山古墳出土銀錯銘鉄刀で確認できる「典曹人」も、杖刀人と同様に地方豪族の上番が組み込まれた宮の官僚組織であり、倭政権の統治機構が雄略紀には、関東・九州を覆いつつあったことがうかがえる。筑紫君磐井の上番（『日本書紀』卷一七）も「人制」下でなされたと理解でき、磐井も大王を支える官僚の一人であった可能性が高い。

筑紫君磐井を討伐した軍隊 杖刀人の職掌に関する史料は乏しいが、平時における大王・宮の守衛が基本職掌であったと見られ、韓半島に向けた軍事動員（外征軍）に際しては、別個に將軍を任命し、軍隊を戦時編成していたと考えられる（下向井一九九一）。筑紫君磐井の乱に際しても、物部麁鹿火が將軍に任命されている。物部麁鹿火が編成した軍隊の内実は未伝であるが、中央の伴造（物部）として各地の伴部を動員したと見られる。倭王権に従った地方豪族（県主等）も、物部麁鹿火の要請に応じて兵員を確保したと見た方がよい。また、継体天皇の即位を契機として国造制整備が畿内を中心に進行了た説に従えば、初期国造軍が動員体系に組み込まれていた可能性がある（篠川二〇二一）。

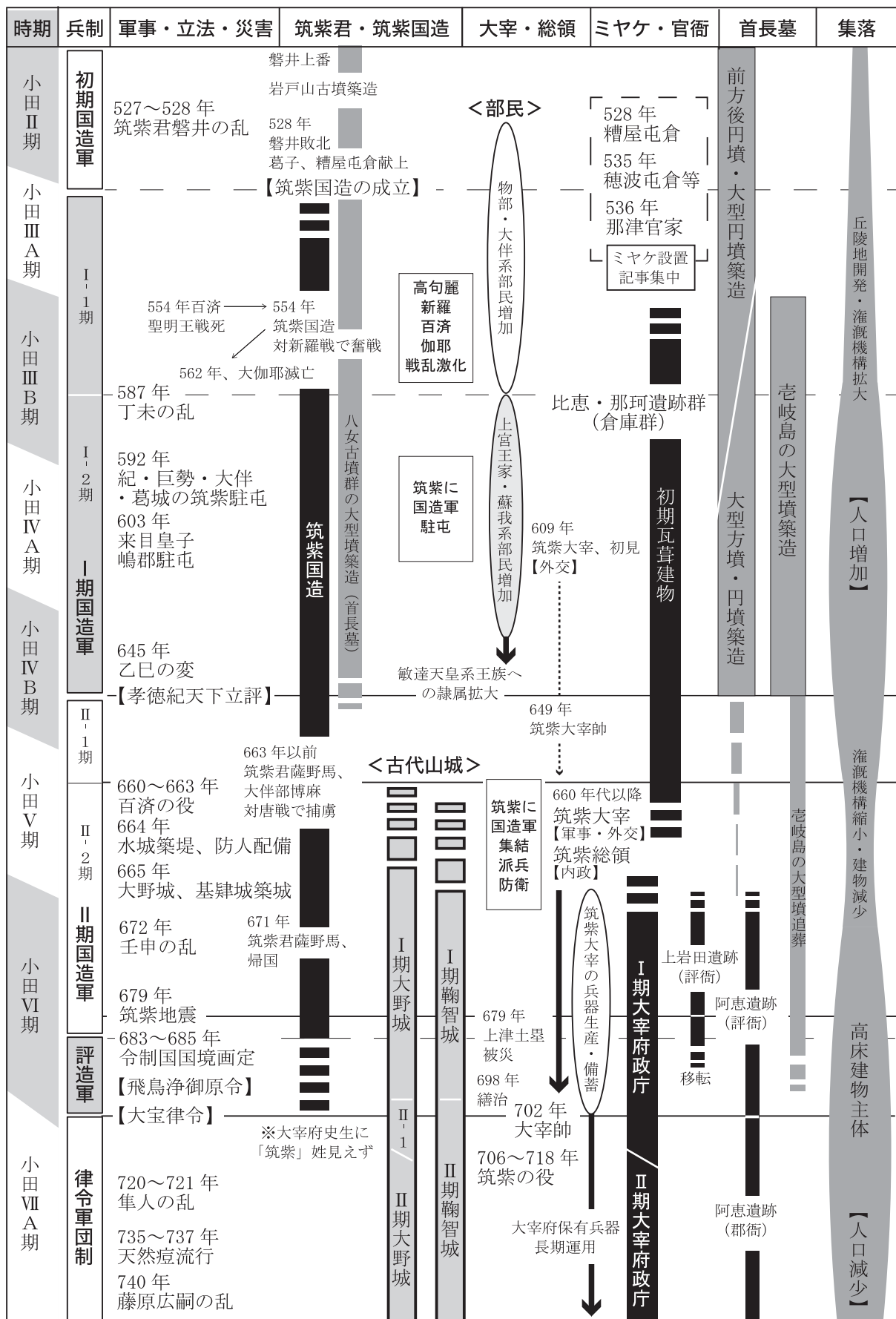


図 17 国造軍の変遷と筑紫島の動態

(二) I期国造軍

筑紫国造軍の外征動員 筑紫君磐井の乱を経て、筑紫嶋でのミヤケ設置・国造制整備が進み、外征軍としての国造軍運用が始動する。I期国造軍では、要請された兵数に対し、各国造（豪族）単位で歴史的に培ってきた慣習法・人的結合に基づいた独自の動員方式を用いていたと考えられる。つまり、I期国造軍は古墳時代社会の多様性が反映された軍隊であった（下向井一九九一）。ミヤケ設置は比恵遺・那珂跡群から実証できるものの、倉庫群の設置年代については、文献史料（『日本書紀』宣化元年（五三六年））と考古資料（小田ⅢA期新相以降）では乖離がある（久住二〇二二）。国造軍の動員では、『日本書紀』欽明一五年（五五四年）の百濟・聖明王戦死後の窮地に「筑紫国造」が、新羅の包囲軍を破る奮戦が記される。また、同記事に先立つ百濟による新羅攻撃時には、内臣とともに渡海した筑紫物部莫奇委沙奇の活躍も記されており、磐井の乱後に増加した筑紫物部の軍事動員が認められる。欽明一五年記事は韓半島の戦場における国造の初見史料であるが、比恵・那珂遺跡群における倉庫群の出現時期と親和性が高く、「施設（倉庫群）」としてのミヤケ整備が当該期に進展したのは確かである。この欽明一五年に軍事的緊張の頂点を迎える韓半島の動乱に際しては、物部氏・大伴氏が対外戦略の主導的役割を果たしたが、五六二年の大伽耶滅亡が示すように、古墳時代後期前半における倭政権の軍事介入（任那復興）は失敗に終わった【国造軍Ⅰ・1期】。

軍事動員と部民制の展開 丁未の乱で物部氏（本宗家）が没落すると、上宮王家・蘇我氏が対外戦略を主導した【国造軍Ⅰ・2期】。この丁未の乱で対物部戦に参戦した四氏族（紀・巨勢・大伴・葛城）は、

五九二年の筑紫出兵を機に筑紫嶋における物部系部民の解体を進めた（田中二〇〇八）。次いで、六〇二年の「撃新羅將軍」来目皇子の筑紫嶋郡（糸島）の駐屯では、国造・伴造の従軍が記されており、同軍事動員が国造制・部民制に依っていたことがうかがえる。同駐屯を機に上宮王家による部民制の集積が筑紫嶋一円でなされたことが指摘されている（酒井二〇〇九・二〇二一）。筑紫君葛子献上の糟屋屯倉も管掌氏族が春米連であり、上宮王家の支配下に置かれた。このように上宮王家・蘇我氏主導の対外戦略下で、筑紫嶋の統治機構は再編されていた。

古墳時代後期の遺跡動態 古墳時代後期は丘陵地開発が活発化し、灌漑機構の広域整備も展開する（小嶋二〇二二）。そして、小田ⅣA期（古墳時代後期後半）に人口増加が頂点を迎える。首長墓では前方後円墳墓制は衰退するが、古墳墓制自体はより広範に普及し、造墓活動（新式群集墳）にも多くの労働力が投下されていた。

(三) II期国造軍

孝徳紀天下立評 評制の施行により、地方支配体制は「国造―評造―五〇戸造」に編成された（篠川一九八五）。国造のクニ内部には、国造の直轄地・集団のほかに、地方伴部等の豪族や、これらに任命されていない豪族が存在した。筑紫の場合は、筑紫国造の直轄地は八女領域、地方伴部としては春米や大神等が福岡平野周辺に分布が認められ、非任命の豪族では胸肩君が宗像領域を形成していた。評制はこれら諸集団を評という統一組織にまとめ、奉仕義務をもたなかった集団にも一律の賦役を課した。

評制下においても「国造には、クニ内部のすべての評を統括する

役割や、評の範囲を超える貢納・奉仕における役割が期待され、義務づけられた」(篠川二〇二二)。軍事動員も戸(徴兵単位としての五十戸制)を単位として、クニ内部の一律的負担となるよう改変されたが、部隊運用においては国造が引き続き指揮権を担う構造を維持した【Ⅱ・1期国造軍】。また、実態は未確定だが、兵器(兵士)の個人装備も数量調査をした後に、国造ら在地首長に一括返還されたと理解されている(下向井一九九一)。

天下立評の痕跡は「評衙遺跡」としては現れず、現象としては大型方墳・円墳の築造停止(小田ⅣB期)が肯定でき、豪族の私的動員抑止が同時多発的に広域で認められる(制限法としての「薄葬令」)。古墳築造も担った労役体系の改変は、地域の生活基盤整備・維持にも影響を与えた可能性があり、古墳時代後期に成立した灌漑機構の改変事例も見出されはじめている(小嶋二〇二三a c)。

百済の役と筑紫国造軍 「百済の役」では、古墳時代後期後半の開発地拡大・人口増加と、天下立評による労役体系・兵器消費と保管の改変を経て蓄えられた人的資源・物資が韓半島に投下された。同戦役では宮自体が筑紫に西下し、国造軍の動員・差配を担った【国造軍Ⅱ・2期】。百済の役後においても、筑紫嶋では筑紫大宰が対外防衛における現地指揮を担った。

筑紫国造軍は戦役の初期段階で渡海したと見られ、白村江の戦い以前に筑紫君薩野馬・大伴部博麻(上妻評居住)は唐軍の捕虜になっている。同じく、捕虜となっていた筑紫三宅連得許は筑紫ミヤケの管掌氏族、韓嶋勝娑婆は豊(後の豊前国宇佐郡辛島郷)の豪族と見られ、筑紫嶋各地の国造軍が動員されたことを物語る(酒井二〇一八)。

古代山城の築城と国造軍の筑紫集結 百済の役直後に築城記事が

集中する古代山城の威容は、『日本書紀』に記載された白村江の戦いの動員兵数約四万七千人に信憑性を抱かせる。古代山城のうち、水城・大野城は小田Ⅴ期に築城されたと判断でき、鞠智城も同時期に築城された可能性が高い。当該期における大規模労役を可能とする動員体系は「国造―評造―五〇戸造」編成であり、同動員により筑紫に集結していたのが国造軍である。国造軍の筑紫集結期間は、少なくとも斉明七年三月二五日(斉明天皇、那津到着)から天智二年三月の派兵にいたる約二年間におよぶ。その間に二回の大規模派兵がなされ、集結兵数の増減は著しいが、宮自体が筑紫に西下した状態にあることから、天智二年後も一定数の守衛部隊が駐屯状態にあったと見る。また、白村江の敗戦を経て、帰国した国造軍を直ちに解散させたとは考え難く、帰郷に向けた部隊の再編成も兼ねつつ、唐・新羅の動勢を把握するまでは、対馬・壱岐・筑紫での駐屯を継続したと考えられる。防人は古代山城の運用のような防衛戦争を担うものではなく、敵軍を確認し、烽等を用いて早期の国造軍展開に向けた情報収集・伝達を図ることが当初の主要任務であったと考える。

以上をふまえると、百済の役における駐屯と白村江敗戦直後の防衛において、国造軍の筑紫集結期間は複数年に及ぶ。つまり、本兵役期間に古代山城の築城(労役)にも国造軍が動員されたことで、平時とは異なる「戦時」での短期間かつ大規模労役が可能になったと考える。筑紫縦貫道を軸とした第一段階古代山城群、とくに二日市地峡帯周辺の築城には、短期間に広域からの労役徴発がなされたことを想定しないと、『日本書紀』記載の築城記事は成立し得ない(白村江敗戦後の防衛体制における築城期(小田二〇一六)(註4)。また、対馬という離島に位置し、城郭としての完成度が高い金田城

の築城動員は、島外からの新規徴発に多大な労力がかかるため、対馬での国造軍駐屯期間に築城が開始されたことが有力視できる。上記見解は、古代山城築城のための新規徴発を否定するものではなく、両動員の重複と認識する。

古代山城築城技術と古墳築造技術 古代山城の築城技術には、新来の百済系土木技術（版築等）が用いられているが、近年の調査において、古墳築造技術の応用事例（天神山水城・前畑土塁）も確認されはじめた（図18）。具体的には、「土塊・盛土内層状被覆土・盛土傾斜積み・外皮盛土」の組み合わせであり、同土木技術は九州北部の古墳築造技術と直接系譜を有しており、同地での労役徴発を示す物証である（小嶋二〇二三b）。

（四）評造軍

国境画定と筑紫国造の解任 天武一二～一四年（六八三～六八五）年の国境画定事業「令制国の成立」により、国造制は廃止される（篠川一九八五）。筑紫君も本拠地である上陽畔評の評造を帯するのみとなったと想定される（酒井二〇二二）。国境防衛の総監は、百済の役時には成立していた筑紫大宰（後期筑紫大宰）がすでに担っており、筑紫国造の軍事的役割も低下していた。

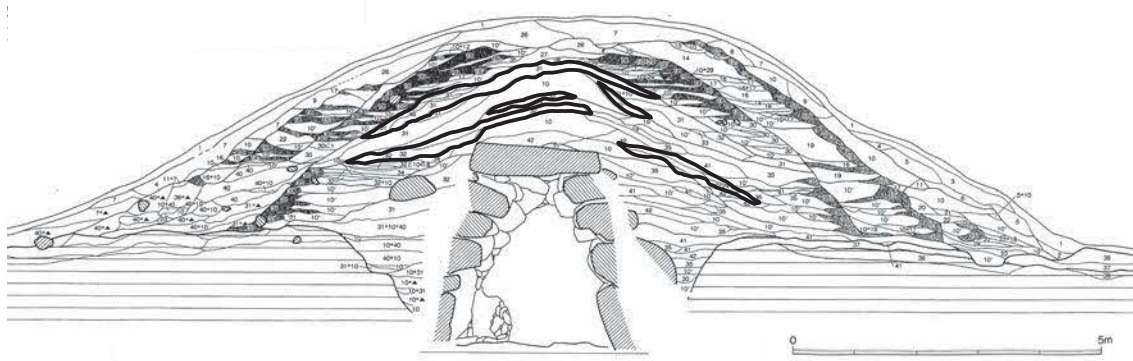
武器収公と評衡の成立 次いで、天武一四年の武器収公により、「大角・小角・鼓・吹・幡旗」の指揮具について私家での保管が禁じられ、すべて郡家（評衡）に収めることが義務づけられた（下向井一九九一）。本詔は国造制廃止決定時に発せられたものであり、ここでの私家とは「国造の居宅」を指すとの指摘がある（篠川二〇一八）。指揮具の収公を物理的に実現するものが評倉（評衡）であり、

天武一四年には「遺跡」としての評衡の存在が確認できる。本点をふまえると、評衡成立以前においては、指揮具・大型兵器の運用は国造が担っていたと把握でき、少なくとも百済の役まで国造軍が維持されたと理解できる。国造制廃止・武器収公をもって、国造軍は終焉したと識別する。

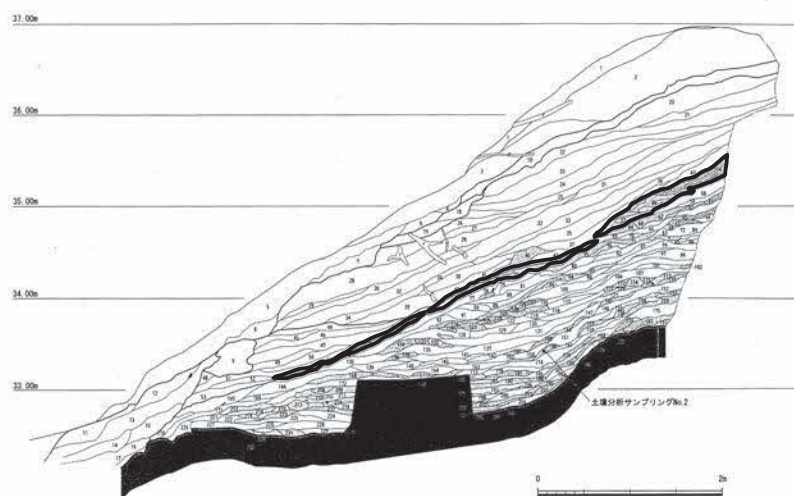
筑紫大宰の軍事的機能 壬申の乱における筑紫大宰・栗隈王の返答「筑紫国者元戊辺賊之難也」（『日本書記』卷二八）に象徴されるように、筑紫大宰は辺要防衛を担った。この辺要防衛には、兵器の生産・備蓄も内包されており、筑紫大宰により備蓄された兵器は、大宰府保管兵器として律令軍団制下でも長期運用された（図19）（小嶋二〇一四・二〇一六a）。

（五）小結

国造と古代山城 筑紫国造の成立は、継体二二年の糟屋屯倉献上と欽明一五年の百済・聖明王戦死の間に絞り込め、乱後の戦後処理（小田ⅢA期）が画期と見込まれる（酒井二〇一八）。外征軍としての国造軍の画期は、比恵・那珂遺跡群での倉庫群成立が重要な物証で、韓半島への軍事的渡海（『日本書記』卷十九）と符合する。孝徳紀天下立評を経て国造軍の動員体系は変容するが、部隊編成・指揮権は依然として国造が担った。本国造軍【国造軍Ⅱ・2期】が百済の役における投入軍隊であり、第一段階古代山城の運用をなし得た唯一の動員体系である。城内のみでも広大な面積を有する古代山城群を軍事的に機能させるためには、百済の役に匹敵する動員数が必要である。



福岡県上毛町・皿山古墳群Ⅰ-Ⅰ号墳断面図 (S=1/120)



福岡県春日市・天神山水城跡1次調査土塁断面図 (S=1/80)

○：黒枠囲み部分が「盛土内層状被覆積み」
※「土塊」と同質土砂で、遮水性高い。

図18
古墳築造技術と
古代山城築城技術の連続性

時期	甲冑	弓矢	蔵司地区出土被熱遺物				画期
7c 後半	小札幅縮小	棘篋被主体	【小札】	【両頭金具】 98 点	【棘篋被】 1,912 点	【関篋被】 138 点	古代武器様式 1 段階
8c 前半	綿襖甲出現	両頭金具消滅 関篋被主体					
8c 後半	小札二枚重ね出現 革甲出現	棘篋被消滅					
9c 前半	第3威孔消滅						
9c 後半	星兜の上限	篋被短化 鎬矢変化 柳葉Ⅰ式出現	星兜含まない		柳葉Ⅰ式含まない		古代武器様式 2 段階
10c 前半	 承平・天慶の乱 (941 年、大宰府襲撃)						
10c 後半	星兜定式化指向 二行十三孔小札 大鎧出現	鑿根Ⅰ式出現	二行十三行小札 ・大鎧含まない		鑿根Ⅰ式含まない		初期中世 武器様式 1 段階
11c	星兜定式化						
12c		中世組成 (柳葉Ⅰ式 ・鑿根Ⅰ式・雁又式) の完成			中世組成含まない		初期中世 武器様式 2 段階

※様式設定は津野仁 2015『日本古代の軍事武装と系譜』、小嶋篤 2016『大宰府の軍備に関する考古学的研究』より引用

図19 大宰府備蓄兵器と武器様式

おわりに

新規築城型古代山城である大野城跡から出土した豊富な土器の総量分析に基づいて、第一段階古代山城の大野城が小田Ⅴ期に築城されたことを確認した。そして、「倭政権の統治と外征」・「国造軍動員と労役」の検討を経て、第一段階古代山城の運用を可能とする動員体系を探るため、国造軍の成立から終焉にいたる兵制史を文献史料と考古資料を突き合わせてまとめた。『日本書紀』記載の「築・築城」が、古代山城の「築城開始」・「築城完了」のいずれを示すかは未決着であるが、筑紫における第1段階古代山城の築城期間（小田Ⅴ期）は、「戦時」が含まれており、国造軍駐屯期間と重なる。平時とは異なる「戦時」での軍事施設整備には、駐屯中の国造軍も動員されたと見るべきで、新規徴発の労役と組み合わせる早期の築城が図られたと考える（註5）。

鞠智城は築城史料を欠くが、築城・整備期において土器出土量の推移が大野城と連動することから、ほぼ同時期に築城され、国家（筑紫大宰・大宰府）により一体的に管理されていたと考えられる。本構造の根源には、倭政権の外征軍「国造軍」があり、同動員体系・動員路・戦術・兵器と倭政権主導の新戦略・新技術が組み合うことで、「戦時」の防衛体制が成立したと結論できる（小嶋二〇一六b・二〇二一）。

※図9・10・11・15掲載の地図・写真は国土地理院地図を利用した。また、図12掲載の『田嶋外伝浜千鳥』は筑紫野市歴史博物館所蔵資料である。

註

註1…前稿「火国の領域設定と鞠智城」では、国造軍の変遷が未整理であったために、国造軍・評造軍の定義が曖昧であった。本稿の成果をふまえると、前稿の評造軍は本稿の「Ⅱ・2期国造軍」に該当する。

註2…鹿部田淵遺跡を「糟屋屯倉」とする説もある。同遺跡は古墳築造範型等の分布と宗形郡の郷比定から見て、古墳時代後期～平安時代は宗像領域内に含まれる（小嶋二〇一二・大高二〇一七）。「屯倉」・「宅」と認定し得ても、「糟屋屯倉」とする論拠が別個に必要であり、現状の論拠は戦国時代を経て拡大した糟屋郡域を用いるに過ぎない。

註3…乃詳爲天皇作陵、詣播磨、興山陵於赤石、仍編船、經于淡路嶋、運其嶋石而造之。則每人令取兵、而待皇后。」（『日本書紀』卷第九）「是夜半、赤兄遣物部朴井連鮪率造宮丁、圍有間皇子於市經家。」（『日本書紀』卷第二六）

卷第九記事には、陵（大王墓）築造を偽装して、兵員を確保した旨が記されている。卷第二六記事は、古墳造営ではないが、宮造営の人夫を軍事動員した旨が記されている。

註4…向井一雄氏は、『日本書紀』記載の古代山城築城を「着工」とみてきた想定を「完成」として見直してみる必要性を説く（斎藤・向井二〇一六、向井二〇一七）。

註5…筑紫における第1段階古代山城の築城に、国造軍動員を想定したが、すべての古代山城が同時期に同じ動員体系で築城されたと一律的に把握するのではなく、その動員体系・築城時期は各古代山城の物証から絞り込んでいく必要がある。

参考文献

- 荒牧宏之・松尾奈緒子・田上勇一郎・大澤正己二〇一四『比恵66』福岡市埋蔵文化財調査報告書第一二三七集 福岡市教育委員会
- 稲田孝司二〇一二「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』第三四号 一般社団法人日本考古学協会
- 宇野慎敏二〇二二「豊前北部における古墳時代後期の集落と古墳」『集落と古墳Ⅲ』九州前方後円墳研究会
- 近江俊秀二〇一八『入門 歴史時代の考古学』同成社
- 大高広和二〇一七「古代宗像郡郷名駅名考証(三)」『沖ノ島研究』第三号「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 小田富士雄二〇一六「大宰府都城の形成と東アジア」『季刊考古学』第一三六号 雄山閣
- 小田富士雄二〇二二「国史跡「壱岐古墳群」と「壱岐嶋造」」『古文化談叢』第八七集 九州古文化研究会
- 小田富士雄二〇二三「「壱岐古墳群」の外来系文物とその背景」『古文化談叢』第八八集 九州古文化研究会
- 亀田修一 二〇一八「繕治された大野城・基肆城・鞠智城とその他の古代山城」『大宰府の研究』高志書院
- 木村龍生二〇一三「須恵器から見た地域間交流の様相」『古墳時代の地域間交流Ⅰ』第一六回九州前方後円墳研究会
- 木村龍生編二〇一五『鞠智城跡出土土器・瓦の生産地推定に関する基礎的研究』歴史公園鞠智城・温故創生館
- 木村龍生二〇一六「土器の様相からみた古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』熊本県教育委員会
- 木本雅康二〇一六「古代の官道と烽」『飯塚市史』上巻 飯塚市

久住猛雄二〇二三「6世紀中頃〜7世紀代の比恵・那珂遺跡群」『集落と古墳の動態Ⅴ』第二四回九州前方後円墳研究会

藏富士寛二〇二〇「複室構造横穴式石室・九州地域の横穴式石室に対する構造的理解に向けて」『横穴式石室の研究』同成社

小嶋篤二〇二二「墓制と領域・胸肩君一族の足跡」『九州歴史資料館研究論集』三七 九州歴史資料館

小嶋篤二〇一四「大宰府保有兵器の蓄積過程」『古代武器研究』一〇 古代武器研究会

小嶋篤二〇一六a「大宰府の軍備に関する考古学的研究」平成二五(二七)年度科学研究費助成事業若手研究(B)研究成果報告書九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター

小嶋篤二〇一六b「鞠智城築造前後の軍備」『鞠智城と古代社会』第四号 熊本県教育委員会

小嶋篤二〇一六c「兵器の様相から見た古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』熊本県教育委員会

小嶋篤二〇一八「前方後円墳の終焉」から見た胸肩君『沖ノ島研究』第四号「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産登録推進会議

小嶋篤二〇二〇「筑後の横穴式石室墳・筑後型石室と八女型石室」『福岡大学考古学論集三』武末純一先生退職記念事業会

小嶋篤二〇二二「火国の領域設定と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第九号 熊本県教育委員会

小嶋篤二〇二二「遠賀川流域の古墳と集落・造墓秩序と生活圏」『集落と古墳Ⅲ』九州前方後円墳研究会

小嶋篤二〇二三a「筑紫君の墓域と開発」『九州歴史資料館研究論集』四八九州歴史資料館

小嶋篤二〇二三b「古代山城の築造動員と古墳の築造動員」『大宰

府外郭線Ⅰ』九州歴史資料館

小嶋篤二〇二三c「遠賀川流域と飛鳥時代」『集落と古墳Ⅳ』九州前方後円墳研究会

小松譲一九九九「肥前東部地域の横穴式石室・導入と展開および終末」『九州における横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会

齋藤慎一・向井一雄二〇一六『日本城郭史』吉川弘文館

酒井芳司 二〇〇九「倭政権の九州支配と筑紫大宰の派遣」『九州

歴史資料館研究論集』三四九州歴史資料館

酒井芳司二〇一八「筑紫国造と評の成立」『大宰府の研究』高志書院
酒井芳司二〇二二「九州北部の豪族と筑紫大宰」『大宰府史跡指定

一〇〇年と研究の歩み』九州国立博物館アジア文化交流センター

研究論集第二集九州国立博物館

篠川賢一九八五『国造制の成立と展開』吉川弘文館

篠川賢二〇二二『国造 大和政権と地方豪族』中央公社

下向井龍彦 一九九一「日本律令軍制の形成過程」『史学雑誌』

一〇〇・六公益財団法人史学会

下原幸裕二〇一六『古墳時代墓制の終焉過程からみた律令国家形成期の北部九州』平成二四～二六年度科学研究費補助金若手研究

(B) 研究成果報告書九州歴史資料館

高木恭二二〇一二「菊池川流域の古墳」『マロ塚古墳出土品を中心とした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第一七三集 国立歴史民俗博物館

田中聡一郎二〇二一a「杵岐島における後・終末期古墳の動向」『古

代杵岐島の世界』高志書院

田中聡一郎二〇二二b「杵岐古墳群」について『巨大古墳の時代』杵岐市教育委員会

田中正日子二〇〇八「筑紫大宰とその支配(その1・2)」『ふるさとの自然と歴史』三三二・三三二 歴史と自然をまもる会

辻田淳一郎二〇二三「前方後円墳の築造停止とその背景・北部九州を中心に」『史淵』一六〇九州大学大学院人文科学研究院

中島圭二二〇二〇「筑前・筑後における古墳時代後期の土師器大型高坏」『福岡大学考古学論集3』武末純一先生退職記念事業会

西垣彰博二〇二三a「糟屋地域における七世紀の集落と古墳の動態について」『集落と古墳の動態Ⅴ』第二四回九州前方後円墳研究会

西垣彰博二〇二三b「阿恵官衙遺跡周辺の官衙関連遺跡について」『令和五年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会

林正憲二〇二二「畿内からみた古代杵岐」『古代世界の中の杵岐』

杵岐市教育委員会

広瀬和雄二〇二三「終末期古墳の歴史的意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一七九集 国立歴史民俗博物館

藤田和裕一九九二「第三章 まとめ」『県内古墳詳細分布調査報告書』

長崎県文化財調査報告書第一〇六集 長崎県教育委員会

松田時彦二〇一四「上岩田遺跡の基壇の地割れと天武七年筑後国地震」『上岩田遺跡Ⅴ』小郡市文化財調査報告書第二七七集 小郡市

教育委員会

松村一良一九九四「上津土壘跡」『久留米市史』第一二巻 久留米市宮本一夫編二〇一八「杵岐原の辻間線遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟

古墳』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

向井一雄二〇一七『よみがえる古代山城』吉川弘文館

森公章二〇一九「海北」から「海西」へ・古代国家成立の画期・「古墳と国家形成期の諸問題」山川出版社

柳沢一男二〇一四『筑紫君磐井と「磐井の乱」岩戸山古墳』新泉社

矢野裕介二〇一八「鞠智城の変遷に関する一考察」『大宰府の研究』高志書院

矢野裕介二〇一九「有明海沿岸における古代山城の年代論」『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第一集九州国立博物館

山崎頼人二〇二二「筑後国御原郡における集落の構造と変遷」『第二五回古代官衙・集落研究会報告書 古代集落の構造と変遷2』奈良文化財研究所研究報告第三六集

山崎頼人・杉本岳史・一木賢人・作山航平・三津山靖也・高橋渉二〇二三「御原郡周辺における七世紀代の集落と古墳の動態」『集落と古墳の動態Ⅳ』第二四回九州前方後円墳研究会

吉田東明・進村真之・宮地聡一郎・小嶋篤二〇二二「大野城跡・四王院跡出土土器の総量分析」『大宰府四王院』九州国立博物館

吉村靖徳二〇〇〇「北部九州における三室構造横穴式石室の様相」

『古文化談叢』第四五集九州古文化研究会